

公立大学法人札幌市立大学
平成29事業年度の業務実績に関する評価結果

平成30年8月

札幌市地方独立行政法人評価委員会

1 公立大学法人札幌市立大学の年度評価の方法

- (1) 年度評価は、「項目別評価」及び「全体評価」により行う。
- (2) 項目別評価は、年度計画の次に掲げる事項（大項目）ごとの実施状況の評価を行う。
 - ① 大学の教育研究等の質の向上
 - ② 地域貢献、国際化、大学間連携
 - ③ 業務運営の改善及び効率化
 - ④ 財務内容の改善
 - ⑤ 自己点検・評価
 - ⑥ その他業務運営
- (3) 項目別評価に当たっては、まず、中期計画の記載項目（小項目）ごとに、次に掲げるⅣ～Ⅰの4段階で評価を行う。なお、評価委員会の評価が公立大学法人による自己評価と異なる場合は、その理由等を示す。
 - Ⅳ：年度計画を上回って達成している。
 - Ⅲ：年度計画を十分に達成している。
 - Ⅱ：年度計画を十分には達成していない。
 - Ⅰ：年度計画を達成していない。
- (4) (3)の評価等を踏まえ、中期計画の大項目ごとに、次に掲げるS～Dの5段階で評価を行う。
 - S：特筆すべき進捗状況にある（評価委員会が特に認める場合）
 - A：計画どおり進捗している（小項目すべてⅣ又はⅢ）
 - B：おおむね計画どおり進捗している（Ⅳ又はⅢの小項目の割合が9割以上）
 - C：やや遅れている（Ⅳ又はⅢの小項目の割合が9割未満）
 - D：重大な改善事項がある（評価委員会が特に認める場合）
- (5) 全体評価は、(4)の項目別評価の結果等を踏まえ、年度計画全体について総合的な評価を行う。

2 全体評価

(1) 総評

平成 18 年 4 月に開学した札幌市立大学は、デザインと看護に共通する「人間重視」の考え方を基本とし、高度な教育研究を行い、デザイン分野と看護分野における有為な人材の育成・輩出と、地域に根ざした公立大学としての地域貢献が期待されている。

平成 21 年度に学部が完成し、平成 22 年 4 月には、デザイン研究科と看護学研究科の大学院博士前期課程、助産学専攻科、平成 24 年 4 月には、大学院博士後期課程を設置しており、大学を間断なく発展させている。

第二期中期目標期間の最終年度にあたる平成 29 事業年度の業務実績の評価としては、「項目別評価」において、6 項目（大項目）すべてが A 評価となったことから、全体として行うべき業務を順調に実施したものと評価する。

(2) 評価内容

ア 大学の教育研究等の質の向上

小項目数 23 のうち、Ⅳ評価が 9 項目、Ⅲ評価が 14 項目であり、高い水準で業務を実施しているものと認められる。

特に、学生の学部教育への満足度がデザイン・看護両学部ともに 8.2 と高いことは高く評価できる（小項目 5）。また、デザイン分野と看護分野が連携した研究を推進していくための取組として、学内研究交流会や産学官金研究交流会を継続的に実施していることは高く評価できる（小項目 18）。

その他、オープンキャンパスの参加者数がさらに増え、それに応じて会場の収容人数を増やし誘導の人員を増やす等、実施状況の改善が進んだ点（小項目 7）、FD 研修会について、回数・参加人数とも成果指標を達成し、授業評価アンケート結果に基づく FD 研修会を開催して組織全体の教育改善に役立てるなど、多彩な内容・形式で実施されている点（小項目 12、13）、科学研究費助成金の新規応募及び継続申請を合わせた申請率が伸びている点（小項目 19）、外部機関や他大学等との連携の場としてのサテライトキャンパスの活用について、件数に加え、人数も成果指標に加え、目標を大きく超える成果を上げた点（小項目 23）等についても、教育研究の質の向上に資するものと高く評価できる。

イ 地域貢献、国際化、大学間連携

小項目数 9 のうち、Ⅳ評価が 6 項目、Ⅲ評価が 3 項目であり、高い水準で業務を実施しているものと認められる。

特に、学内の地域貢献に関わる情報の集約と発信の一連の方策が効果を上げ、地域産学連携協力依頼件数が成果目標件数を大きく上回っていることは、地域貢献に資する取組として、高く評価できる（小項目 24）。

また、学生・教職員の国際化を進め、成果指標（教員・学生の派遣又は受入：計 20 人以上）を達成し、かつ前年度に比べ大幅に増加した（派遣 28 人、受入 101 人計 129 人）ことは、国際化の観点から高く評価できる（小項目 30）。

その他、公開講座について、受講者満足度が安定して好評であり、受講対象者の

幅も広いことから、市民のニーズに対応していることがうかがえる（小項目 26）ほか、海外機関との連携による共同研究を奨励し、新たに設けた成果指標（応募 1 件）を超過達成（3 件）したことは高く評価できる（小項目 31）。

ウ 業務運営の改善及び効率化

小項目数 8 のうち、Ⅳ評価が 1 項目、Ⅲ評価が 7 項目であり、高い水準で業務を実施しているものと認められる。

職員配置や事務分担の見直し、経年的に超過勤務時間を把握する等の取組により、事務の効率化を行い、成果指標を上回っていることは高く評価できる（小項目 39）。

エ 財務内容の改善

小項目数 4 のうち、Ⅳ評価が 2 項目、Ⅲ評価が 2 項目であり、高い水準で業務を実施しているものと認められる。

特に、獲得した外部資金の額が第二期中期目標期間で最も多いことは高く評価できる（小項目 42）。

オ 自己点検・評価

小項目数 3 すべてがⅣ評価であり、高い水準で業務を実施しているものと認められる。

PDC A サイクルに基づく自己点検・評価が適切に実施されていること、教育研究についてはほぼすべての項目に成果指標を設定した結果、計画の進捗状況（優れた点や課題事項）をよりの確に把握できるようになり、取組の改善につながったことは高く評価できる（小項目 45、46）。

カ その他業務運営

小項目数 9 がすべてⅢ評価であり、良好な水準で業務を実施しているものと認められる。

(3) 意見・指摘事項等

大学院については、休学、退学等により学位授与に至らない可能性のある学生に対して、指導教員と学生のコミュニケーションの円滑化、複数指導教員制度の導入なども含めた指導体制の適切な運用など、早めに支援策を講じることが重要である。また、博士後期課程については、業務実績報告書に設置認可申請に基づいた教育を引き続き展開したとあったが、平成 29 年度は看護学研究科において研究計画書の提出がなかったことから、今後は状況に応じた改善が必要であると思われる（小項目 3）。

入試の広報については、過去の志願状況の変化を整理して高校訪問の計画を見直すこと等により、さらに効率的で効果的な入試広報の展開を期待する（小項目 7）。

提携校以外の海外の大学・機関ともネットワークの構築が図られつつある（小項目 29、31）が、今後は国内の研究者・研究機関との共同研究のさらなる発展が必要であると考えられる（小項目 18、19、32 など）。

3 項目別評価

3-1 大学の教育研究等の質の向上に関する評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A

イ 判断理由

小項目すべてがIV評価又はIII評価であるため。

小項目数	評 価 結 果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
23	0	0	14	9	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 高く評価する点

- ・ 学生の学部教育への満足度がデザイン・看護両学部ともに8.2と高いことは高く評価できる（小項目5）。
- ・ ディプロマポリシーの認知度が少しずつ向上していることなどから、3ポリシーの周知等が図られているものとして高く評価できる（小項目5）。
- ・ オープンキャンパスの参加者数がさらに増え、それに応じて会場の収容人数を増やし誘導の人数を増やす等、実施状況の改善が進んだことは高く評価できる（小項目7）。
- ・ 授業評価アンケート、卒業時の教育評価アンケートが継続して実施され、分析・検証・改善が適切に行われ、これに基づくFD研修会を開催して組織全体の教育改善に役立てたことは高く評価できる（小項目12）。
- ・ 平成29年度の成果指標として、「FD研修会の回数」などを追加し、回数・参加人数とも成果指標を達成し、多彩な内容・形式で実施されていることは高く評価できる（小項目13）。
- ・ デザイン分野と看護分野が連携した研究を推進していくための取組として、学内研究交流会や産学官金研究交流会を継続的に実施していることは高く評価できる（小項目18）。
- ・ 成果指標を年々高くしていること、さらには毎年目標指標を達成していることは高く評価できる。科学研究費助成金の新規応募及び継続申請を合わせた申請率の伸びは素晴らしい（小項目19）。
- ・ 研究倫理、利益相反に関する教育は十分に行われていること、委員会についても外部委員を配置していることは高く評価できる（小項目20）。

- ・ 「学術論文掲載料等補助」の制度を「採択課題への支援」から「投稿支援」にしたことは、研究者の立場になった改正であり、国際学会等における発表件数が設定した目標値の倍以上の成果となったことは高く評価できる（小項目 21）。
- ・ 外部機関や他大学等との連携の場としてのサテライトキャンパスの活用について、件数に加えて人数も成果指標に加え、目標を大きく超える成果を上げたこと、利用目的の内訳から、サテライトキャンパスが目的に沿って十分活用されたことがうかがえることは高く評価できる（小項目 23）。

(イ) (ア)のほか、注目する点

- ・ 新カリキュラムへの移行が2年次まで進み、学部連携基礎論、地域プロジェクトなどの新科目が開講され順調に成果を上げているとともに、教育評価アンケートの集計結果をもとに共通科目の効果検証が行われていることは適切と評価できる（小項目 1）。
- ・ 卒業時の教育評価アンケート等による横断型連携教育の効果検証は5年目を迎え定着してきており、検証結果は、経年変化の分析を含めて適切と評価できる。また、アンケートに自由記述欄を追加するなどの手直しが迅速に行われたことは適切と評価できる（小項目 2）。
- ・ 博士後期課程研究計画書の提出件数を新たに成果指標として掲げ、相応の成果が得られたことは適切と評価できる（小項目 3）。
- ・ 共通教育科目、デザイン学部専門教育科目、看護学部専門教育科目各2科目を対象として、国際化・異文化への理解の学習内容を追加し、今後も同様の拡充をすとしたことは、具体的な改善を一步一步進める点で適切と評価できる（小項目 4）。
- ・ 入学者アンケートや入学後の成績追跡調査を活用して、デザイン学部において平成 33 年度以降の入学者選抜試験の変更案を立案したことは適切と評価できる（小項目 6）。
- ・ 中学生を対象とした模擬授業や大学見学などの広報活動は適切な規模で計画、実施されたと評価できる（小項目 8）。
- ・ セメスターごとの登録単位の上限設定は安定した制度として適切に運用されているものと評価できる（小項目 9）。
- ・ GPAによる履修指導は、対象者の選定基準を含めて適切に運用されていると評価できる（小項目 10）。
- ・ 成績評価分布の偏りの是正、ルーブリックによる評価に適する科目への導入拡大、スタートアップ演習における自己評価票の試行等が適切に行われていると評価できる（小項目 11）。
- ・ 平成 30 年度の「キャリアデザイン」の新設は、インターンシップ推進とキャリア教育の推進を促す積極的で具体的な取組であると高く評価できる（小項目 14、15）。
- ・ ポータルシステムの利用状況を的確に把握し、成果指標を具体的な数値を設

定し検証したことは評価できる（小項目 16）。

- ・ 専門分野等のマッチングに配慮して、チューターを配置していることは評価できる（小項目 17）。
- ・ 成果指標（共同研究・受託研究 14 件）が達成されていることは適切と評価できる（小項目 22）。

イ 遅れている点
認められない。

(3) 意見・指摘事項等

- ・ 今後は卒業時の教育評価アンケート結果に、平成 28 年度導入新カリキュラムの成果が現れるのを待ちたい（小項目 2）。
- ・ 今後、休学、退学等により学位授与に至らない可能性のある学生に対しては、指導教員と学生のコミュニケーションの円滑化、複数指導教員制度の導入なども含めた指導体制の適切な運用など、再入学制度のほか、早めに支援策を講じることが重要だと考える（小項目 3）。
- ・ 博士後期課程について、看護学研究科の研究計画書の提出がなかった。設置認可申請に基づいた教育を引き続き展開しているとあるが、設置申請時とはともかく、完成（平成 26 年度）後は、状況に応じて、改善が必要であると思われる（小項目 3）。
- ・ ディプロマポリシーや科目ナンバリング制度の認知度の更なる向上のためには、広報の強化が当面の課題であるが、制度自体やその説明が今の学生には難解すぎるとも考えられるので、次の見直しの機会にこれらの記述・説明を学生にとって分かりやすく興味をひくものにしていくことも重要である（小項目 5）。
- ・ 成果指標（満足度）の根拠（資料）が当初示されていなかった。「資料編」のデータの整理の仕方に配慮を願いたい（小項目 5）。
- ・ 過去の志願状況の変化を整理して高校訪問の計画を見直す等、さらに効率的で効果的な入試広報の展開を期待する（小項目 7）。
- ・ 授業の難易度・進行速度と授業のわかりやすさの関係が一目でわかるような資料作成・共有をご検討いただきたい（小項目 12）。
- ・ 授業評価アンケート結果をFD研修会に活用することについて、重点項目として行動指標だけでなく成果指標を設定し、それに沿って点検・評価することが望ましい（小項目 12）。
- ・ 短時間で実施するショートFD研修会の取組は、教職員の負担とFDで得られる効果のバランスが良いと思われるので、今後も継続することを期待する（小項目 13）。
- ・ キャリア教育のデザイン学部の学外実習 A について、協力団体・企業の数及びインターンシップ参加学生数が減少していたことに留意いただきたい。また、ポートフォリオ作成状況アンケートの学生へのフィードバックを期待する（小項目 14）。
- ・ 「研究・活動事例集 2017」及び「教員研究紹介 2017」を用いたPR活動の成果を期待する（小項目 22）。

3-2 地域貢献、国際化、大学間連携に関する評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A

イ 判断理由

小項目すべてがIV評価又はIII評価であるため。

小項目数	評価結果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
9	0	0	3	6	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 高く評価する点

- ・ 成果指標に地域産学連携協力依頼件数という具体的な数値目標を掲げたこと、学内の地域貢献に関わる情報の集約と発信の一連の方策が効果を上げ、地域産学連携協力依頼件数が成果目標件数を大きく上回っていることは高く評価できる。また、HPの地域貢献活動のページが大変よくできている（小項目 24）。
- ・ まちづくりに貢献した事例数は安定して成果指標を大幅に上回った状態が続いており、地域に貢献する大学の姿は高く評価できる。また、「研究・活動事例集」「教員研究紹介」の発行、HPでの発信も充実しており、ネットワーク構築への展開が期待できる（小項目 25）。
- ・ 公開講座について、成果指標に実施件数を加え、満足度と合わせて、量・質ともに評価していることは高く評価できる。受講者満足度が安定して好評であり、受講対象者の幅も広いことから、市民のニーズに対応していることがうかがえる（小項目 26）。
- ・ COC企画（参加者 540 名）と地域連携研究センター主催企画（参加者 503 名）の参加者人数がほぼ同数になり、COC事業終了後も継続可能な状況になっていることは、高く評価できる。また、「公開講座の受講者数」を成果指標に掲げたことは高く評価できる（小項目 27）。
- ・ 学生・教職員の国際化を進め、成果指標（教員・学生の派遣又は受入：計 20 人以上）を達成し、かつ前年度（計 60 人）に比べ大幅に増加したこと（派遣 28 人、受入 101 人 計 129 人）は高く評価できる（小項目 30）。
- ・ 海外機関との連携による共同研究を奨励し、新たに設けた成果指標（応募 1 件）を超過達成（3 件）したことは高く評価できる（小項目 31）。
- ・ 学内共同研究費において、海外研究者との共同研究を推進した結果、国際交流事業が共同研究へと発展したことは高く評価できる（小項目 31）。

(イ) (ア)のほか、注目する点

- ・ 専門職業人支援講座の成果指標が安定して達成できていること、さらにニーズを把握して中堅看護師研修の拡大をはかったことは評価できる（小項目 28）。
- ・ 大学の国際化に関する方針を策定し戦略的な取組を行った結果、学生・教職員の国際化を進め、海外提携校との交流の活性化に関する成果指標（各 1 件）を達成しており、大学の国際化が順調に推進されていることは評価できる（小項目 29）。
- ・ 「地（知）の拠点整備事業」「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」により大学間ネットワークの形成が推進されたことは評価できる（小項目 32）。

イ 遅れている点

認められない。

(3) 意見・指摘事項等

- ・ まちづくりに貢献した事例数は「地域の委員等として教員を派遣」した件数であるが、教員派遣であれば、延べ人数も成果指標に入れることが望まれる。また、「委員就任等」の実績についても、自治体委員・講師等の区分がなされているので、区分別件数集計を行い事例数変化の要因を把握できるように整えることが望まれる（小項目 25）。
- ・ 提携校以外の大学とも海外ネットワークが図られつつあることから、さらなる発展が期待できる（小項目 29）。
- ・ 事業の拡充に伴い、成果指標を派遣事業と受入事業に分け、それぞれ教員と学生の内訳を経年的に点検できるよう準備を整えることが必要と思われる（小項目 30）。
- ・ ネットワークを活用した地方創生推進事業の本格的始動を期待する（小項目 32）。

3-3 業務運営の改善及び効率化に関する評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A

イ 判断理由

小項目すべてがIV評価又はIII評価であるため。

小項目数	評 価 結 果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
8	0	0	7	1	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 高く評価する点

- ・ 職員配置や事務分担の見直し、経年的に超過勤務時間を把握する等の取組により、事務の効率化を行い、成果指標を上回っていることは高く評価できる（小項目 39）。

(イ) (ア)のほか、注目する点

- ・ 市派遣職員の減員について計画を達成したものと評価する（小項目 36）。
- ・ 広報メディアの制作実務を担当するチームの設置、CMSの活用、情報アクセシビリティへの配慮などの取組は、成果指標（アクセス数）は達成できなかったものの、評価できる。また、今後、客観的な指標により成果を検証できるように準備を進めていることは評価できる（小項目 40）。

イ 遅れている点

認められない。

(3) 意見・指摘事項等

- ・ 今後は成果指標を設定し、それに沿って点検・評価することが望ましい（小項目 33～35、37～38）。

3-4 財務内容の改善に関する評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A

イ 判断理由

小項目すべてがⅢ評価であるため。

小項目数	評 価 結 果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
4	0	0	2	2	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 高く評価する点

- ・ 獲得した外部資金の額が第二期中期目標期間で最も多いことは高く評価できる(小項目 42)。
- ・ 中期計画の成果指標を大きく上回る経費節減努力は高く評価できる(小項目 44)。

(イ) (ア)のほか、注目する点

- ・ 指標(教員向け情報提供回数)を設定し、それを達成していることは評価できる(小項目 41)。

イ 遅れている点

認められない。

(3) 意見・指摘事項等

- ・ 中期計画の成果指標に相当する指標を年度計画でも設定することが望ましい(小項目 42、44)。
- ・ 今後は成果指標を設定し、それに沿って点検・評価することが望ましい(小項目 43)。

3-5 自己点検・評価に関する評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A

イ 判断理由

小項目すべてがIV評価であるため。

小項目数	評 価 結 果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
3	0	0	0	3	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 高く評価する点

- ・ PDCAサイクルに基づく自己点検・評価が適切に実施されている。特に教育研究については、ほぼすべての項目で成果指標を設定した結果、計画の進捗状況（優れた点や課題事項）をよりの確に把握できるようになり、取組の改善につながったことは高く評価できる（小項目 45、46）。
- ・ （公財）大学基準協会の認証評価を受審し大学基準「適合」の認定を受けたことは高く評価できる（小項目 47）。

イ 遅れている点

認められない。

(3) 意見・指摘事項等

特にない。

3-6 その他業務運営に関する評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A

イ 判断理由

小項目すべてがⅢ評価であるため。

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
9	0	0	9	0	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

(ア) 高く評価する点

特にない。

(イ) (ア)のほか、注目する点

- ・ 指標（図書整備冊数、文献ガイダンスの実施回数）を設定し、それを達成したことは評価できる（小項目 49、51）。
- ・ 成果指標（エネルギー消費：前年比減）は達成できなかったが、特殊要因によるものであることを認める（小項目 56）。

イ 遅れている点

認められない。

(3) 意見・指摘事項等

- ・ 今後は成果指標を設定し、それに沿って点検・評価することが望ましい（小項目 48、50、52～55）。